
Best

Aスケサントマリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Best

【Nコード】

N4306T

【作者名】

Aスケサントマリア

【あらすじ】

主人公の俊作を中心に巻き起こる恋愛、野球、補習、はりせんありの「笑いあり、涙あり、笑いあり、笑いあり」のドタバタコメディです。

第1話 ・ はじまり ・

クリスマスも近づいた都内某所の朝。

心地よい風、眩しい光、澄んだ空気、そして小鳥たちのさえずり、12月とは思えないほどの爽やかな朝。

「うわ、また遅刻かよ。」

爽やかな朝に似合わない台詞を吐き捨て自転車で爆走する少年がいる。

その少年は、他の通行人の視線も気にせず、競輪選手のごとく車道を走り抜ける。もちろん法定速度はギリギリ守られている。

この少年こそが、この物語の主人公である。

名前は徳田とくだ 俊作しゅんさく。

年齢は16才、身長170cm弱、都内の私立高校生の一年で、顔は小池徹兵と小泉孝太郎を足して2で割ったような顔であるのだが、イマイチあか抜けない顔である。

「あか抜けないって、なんだよ!!」

「いまさら気付いたの？おはよう、シュン。」

「ひかりさん、ご冗談を…。それにしても今日はベスト走行だったよ。」

独りで頷き、携帯電話の時間を眺める俊作。

「ちょっと、チャイムは登校開始の合図じゃないのよ。」

なぜ俺の考えていることがと言わんばかりの顔の俊作が鞆を机に放り投げ、椅子を横向きにして座る。ひかりは隣の席で横向きの方が話しやすいからである。

「こんな爽やかな朝に注意なんて、だから鉄人って呼ばれるんだよ。先生がいないからいいんだって。」

「高城先生を基準にしないで。あの人は先生だけど生徒以下なんだから。あと爽やかから程遠いあか抜けない俊作くん、どうこう言われてないわ。強いて言うなら生徒会長として学校の風紀を乱しまくる人を見過ごすわけにはいかないんです。」

喋るスキすら与えないマシンガントークの少女こそが、この話のヒロインである。

名前は石川^{いしかわ} 光^{ひかり}。

年齢は16才。身長160cm程、茶のセミロングのストレートの髪に、くると大きな瞳が特徴的な顔立ちである。痩せ型で凹凸の少ない体型である。誰が見ても明るい性格が伝わってくる雰囲気がありクラスの人気者である。

なぜ、一年生で生徒会長なのかは、次の機会で…。

「おい、説明に差別を感じるんですけど。」

「さっきから何言ってるのよ！？前から変だとは思ってたけど、やっぱりf o o lね。」

「c o o lって……照れるじゃないか。」

「バカもここまで来ると関心の領域だね。」

「俺はバカじゃない、ユーモアだよ。」

毎朝のように、このような光景が繰り返され、周りは喧嘩するほどなんとかかかと思っており放置である。当の本人たちは腐れ縁だと思っっているからたちが悪い。

「はい、座る。」

廊下から声と同時にドアが鈍い音を吐きながらゆっくりと動く。名門私立と自負するわりにはガサツな整備である。

この廊下から入ってきた人は、先ほどの会話に登場した高城先生である。

名前は高城^{たかぎ}祐一^{ゆういち}。

年齢は24才、身長は170cm、カールがかかった黒の髪に、小さい輪郭に対して大きなパーツの顔立ちである。生徒に間違われるくらいの童顔に、見た目通りの性格のため生徒からあまり先生と言っ認識を持たれていない。

高城先生は足でドアを乱暴に閉め教壇に立つ。こんなことから先生としての威厳が皆無になるのである。

高城先生は出席を取りHRを始める。冬休みの連絡をしているのだが生徒たちは聞いていない。そのことに、高城先生も気づいているが気にする素振りも見せずに連絡を続ける。

「最後になるけど、金髪にしようがレインボー髪やサザ。さんヘアにしてもいいけど、警察沙汰だけは勘弁してね。先生も呼び出されるからさ。以上、解散。トリック・オア・トリート!!」

足早に立ち去る高城先生。トリック・オア・トリートはハロウィンの挨拶と知っての発言だろうか。こんないい加減な先生ではあるが意外にも生徒からの信頼は厚い。

HRが終わり俊作たちは終業式のために体育館に向かう。

明中央学院は名門私立のため敷地面積が広く教室から体育館まで5分程度かかる。

全校生徒が集まった体育館は冬休みへの期待感でざわついていた。そのざわめきも終業式定番の校長先生や生活指導の先生の長い話しが始まると、幾分か静かになった。

そんな退屈な時の中で一人の少年（俊作）は意識が遠くなっていた。

終業式が終わり体育館から戻る途中。

「ひかりー、今日も完璧だったね。」

「あつ、みどり。」

声に気づき、振り向くひかり。

この少女の名前は、結城^{ゆづき} 緑^{みどり}。

年齢は15才、身長は160cm弱、金髪のポニーテールに、二

重が特徴的な顔立ちである。ひかりの一番の理解者。

話を戻すが、何が完璧なのかというと、ひかりは明央学院の生徒会長として全校生徒を前に冬休みの心構えについて話したのである。

「まだまだよ。緊張だつてするし、生徒会長でも心は普通の女の子なのよ。」

後ろ向きで歩きながら話すひかり。階段も気にせず後ろ向きで上るのはなかなか器用である。

「えっ、生徒会長の心は鉄じゃないの!？」

前方を歩く外野こと俊作が話に割り込む。幼馴染という生き物は幼馴染をピンポイントで怒らす方法を知っている。

「次回のスピーチは、遅刻魔の不良生徒について話そうかしら。そして遅刻魔にはトイレ掃除をプレゼントする校則でも作ろうかしら。」

幼馴染という生き物は怒らす方法以外にも困らす方法も知っている。

「助けてー！。天下の生徒会長様が権力を肩に善良な生徒を脅迫しています。」

もちろん助ける者などいない。

「どこに善良な生徒がいるのかな？」

額に手を当てて探すフリをする。

勝手にヒートアップする二人。元話し相手こと、みどりは面倒なので傍観していたが口を開く。

「みんなが見ているのに恥ずかしくないの？」

我に返った二人が周りを見ると、クラスメイトたちは、くすくすと笑っている者や呆れている者が大半であった。中にはラブコメな展開に軽く殺意を持っている者までもいた。

「シユンのせいで私までバカな子って思われるじゃない！！シユンのバカ！！！！」

「バカバカって！！俺はバカじゃないぞー！！」

そう言って黙り込む二人であった。いつもより赤みがかった顔で…。

「おい、ひかりん、シュンちゃん、どしたの？」

教室に戻っても機嫌の悪い俊作とひかりに話しかける者たちがいた。

「あれ、返事がないよ、梨佳。こっちもないよ、美佳。うーん…あつ！！これはケンカをした後の夫婦みたいだよ。そうだよー。」

耳がピクツと動くが反論をしない俊作とひかり。

同じタイミングで同じ声が飛んでいるように聞こえるが一人ではなく二人である。その理由は名前から推測できると思うがその二人

が双子だからである。

名前は姉が相川^{あいかわ} 美佳^{みか}、妹が相川^{あいかわ} 梨佳^{りか}。

一卵性の双子で外見はほとんど同じである。年齢は15才、身長は姉が151cm妹は150cm、茶のショートの髪に、吊り目が特徴的な顔立ちである。ひかりと同程度の凹凸の体型である。天真爛漫を地で行くため、そのことが裏目になり無邪気に問題を起こすトラブルメーカーである。

「ほんとに返事がないよ。これはケンカをするほど仲買が儲かるだね。だねー。」

「普通は「ケンカするほど仲が良い」だろ。ケンカで儲かるとか、別れさせ屋かなんかなのか。そんなことより双子はややこしくなるから二人に絡むな。自分のクラスに帰るぞ。」

「えー、ぶー、つまんない。ゆきちゃんがイジメるよー。誰か助けて。」

もちろん助ける者などいないPart2。

誰も反応しないので双子は新たな標的を求めて旅立った。

「シユンとひかりも双子と変わらないよな。適当にあしらえばいいのに、だんまりとかするとまるで真実を言われて動揺してるみたいだぞ。」

「そんなことないわよね、シユン。」

「そうだよ、優希は面白いことを言うな、あはは。」

小学校の卒業式の代表児童の言葉並みに棒読みである。

「この学校は分かりやすい奴ばっかだな。そんなことより、廊下で高城先生がな……。」

この少年の名前は今井^{いまい} 優希^{ゆうき}。

年齢16才、身長178cm、俊作の同じ程度の長さの茶の髪に、東山紀之似の顔立ちである。大人びた性格から俊作や双子たちの目付役のポジションになることが多い。

いよいよ明日から冬休みである。

明央学院は学業だけではなく部活や行事を重んじる校風とエスカレーター進学であることにより、冬休みでも多くの生徒が学校に登校する。

そんな賑やかな冬休みが始まる。

キャラ一覧

徳田 俊作
とくだ じゅんさく

年齢は16才、身長170cm弱、1年B組、黒の少し長めのボサボサした髪に、小池徹兵と小泉孝太郎を足して2で割ったような顔立ちである。野球部に所属しポジションはショート。運動能力は高いが学力の方は勉強不足のため赤点の常連である。樂觀的な性格のため問題が起こっても本人は気にしていない。ひかり以外の女子の押しには弱い。

石川 光
いしかわ ひかり

年齢は16才、身長160cm程度、1年B組、茶のセミロングのストレートの髪に、くると大きな瞳が特徴的な顔立ちである。痩せ型で凹凸の少ない体型である。明央学院の生徒会長であり、弓道部に所属している。運動能力も学力もトップクラスであり、裏表がなく明るい性格であるが俊作相手だと熱くなることが多い。

高城 祐一
たかぎ ゆういち

年齢は24才、身長は170cm、カールがかかった黒の髪に、小さい輪郭に対して大きなパーツの顔立ちである。明央学院の教師で担当は古典である。明央学院の卒業生であり頭は良いはずだが普段の行動や言動には反映されていない。神出鬼没と中学生レベルの性格が売りである。

結城 緑 ゆづき みどり

年齢は15才、身長は160cm弱、1年B組、金髪のポニーテールに、二重が特徴的な顔立ちである。帰宅部であるが喫茶「South Wind」でバイトをしている。運動能力も学力も平均的である。やや腹黒な性格であるが、ひかりの俊作に対する気持ちに気づいており応援している。

相川 美佳 あいかわ みか
相川 梨佳 あいかわ りか

年齢は15才、身長は姉が151cm妹は150cm、1年C組、茶のショートヘアに、吊り目が特徴的な顔立ちである。ひかりと同程度の凹凸の体型であるが本人たちは気にしていない。二人ともテニス部に所属している。運動能力は力勝負にならないものなら完璧にこなす。学力は低い。天真爛漫で好奇心旺盛のため問題を起こしながら歩いている。悪意がないので周りからは嫌われてはいない。

今井 優希 いまい ゆうき

年齢16才、身長178cm、1年C組、俊作の同じ程度の長さの茶の髪に、東山紀之似の顔立ちである。軽音部に所属しベースが担当であり、ボーカルをすることもある。運動能力も学力も高く、性格も大人びているため、女子からの人気が高い。常識人であるため諭したりツツコミしたりする役回りが多い。双子のことを気に掛けており、兄のように面倒を見ている

第二話 ・ 補習の報酬 ・

冬休み初日の教室。

「先生、ここだけが分かりません。」

「その表現は一カ所だけが分からない場合に使うのであって教科書を高々と掲げ使うものではないぞ。」

「そうだよ、シュンちゃん。こういう時は「こんなもんが分かったらここにいません」と言えばいいんだよ。」

「さらに上級者は「こんなもんが分かったらここあ（ココア）いいません」と言えばいいんだよ。」

「そんな甘い考えだから徳田も相川×2も赤点なんだぞ。ココアだけに……。」

双子の迷言に乗った高城先生は置いて、休みに入って早々に期末テストのツケを払わされ学校に出向く俊作と相川姉妹であった。

「先生、こんなふざけた生徒がいていいんですか。一応、名門ですよ。」

もつともなことを言っているのは俊作たちを連れて来たひかりである。

「ひかりが無理やり連れてくから冬休みなのに学校にいるんだし。」

「誰が休みの朝に家まで起こしに行ったと思ってんのよ。こっちは部活と生徒会で忙しいのよ。感謝されることはあっても文句を言われる筋合いはないわよ。」

「徳田、石川の言う通りだぞ。お前らが赤点をとらなきゃ先生は今頃ウイ。レタイムなのだ。先生はウェールズでイングランドを倒さないといけないんだ。ちなみに北アイルランドは昨晚撃破済みだぞ。」

「いやいや、先生は先生なんですから冬休みも登校しないといけないと思いますよ。それになぜイギリス限定なんですか？」

「ひかりはダメだな。イギリスはサッカーの母国ってことも知らないのかよ。ウイ。レはイギリスをやったなんぼなんだよ。」

「その通りだ、徳田。よし補習免除だ!!」

「そんなことで免除しないでください。それにウイ。レは他にもチームがあります。個人的にはポルトガルとアンゴラが好きですね。」

アホなことを言う生徒と教師を注意しながらも話題に乗っかるひかり。実は先生や俊作よりもウイ。レが上手かったりする。得意フオーメーションは4 - 4 - 2でサイドからのセンタリングをメイン戦術である。

「ホント、シュンちゃんはバカだよね。どうやって明央に受かったの？」

自分もバカと言った奴と同じ補習を受けていることを棚上げにして俊作に質問をする双子の姉の美佳。

「そりゃー、過去問を研究したからな、一年半ほど。」

その時間あれば普通に受かるのではと思う一同。

「失礼します。荷物を取ってもよろしいですか？」

「おう、いいぞ。今日は部活か？」

先生の返答を聞いた後、小さくお辞儀をしてから教室に入る少女。

「はい、部活です。あと鈴井先生が徳田を厳しく指導してくださいと言っていました。」

この少女は桑原くははら茜あかねである。

年齢16才、身長167cm、青みがかった黒のロングの髪に、大きな目に筋の通った鼻の完整な顔立ちの上、スタイルも抜群である。野球部のマネージャーをしており、同じ野球部の俊作とは関わりが多い。

俊作と双子は古典で赤点と取ったため補習のために登校しているが、普通の生徒は部活動などのために登校している。俊作とあかねが所属している野球部は活動日であった。そして鈴井先生は野球部も顧問兼コーチである。双子はテニス部に所属しているが今日は活動日ではなく、ひかりが所属する弓道部も同じく活動日ではない。

「よし、徳田！ーうさぎ跳びで校庭20周だー！ー」

「先生、厳しくするものが違います。今日は古典の補習じゃないのですか。それに野球部の方は自主トレの宿題が出るので安心してください。」

高城先生の発言に丁寧に対応しながら机から野球部の活動日誌の大学ノートを出す。その大人びた性格と容姿の上に野球部のマネージャーという点もあり男子からの人気が高い。敵チームの選手がなかなかに見惚れて三者連続見逃し三振をしたとかいう伝説もあるくらいである。もちろん本人は否定している。

「あれ、石川さんは補習じゃ…。」

「ないわよ。この3人だけじゃ、今頃サッカーが野球になってるわよ。」

「それで保護者同伴ってわけ。私も部活がなければね…。」

意味深長な言葉を残し立ち去る。

「キーンコーンカーンコーン…。」

定番のチャイム音が教室に響く。

「業務時間が終了いたしました。先生は帰宅いたします。後は石川さんに任せます。」

チャイムが鳴り終わる前に教室を出る高城先生。そして廊下には「イングリッド覚悟」と響き渡っていた。

「それじゃー、俺らも帰りますか？」

「もしかして帰れると思ってるの俊作くん。」

笑みを浮かべているが目が全く笑っていない。そして左手にはどこからもなく現れた竹刀が握られていた。もちろん、ひかりには補習をさせる義務などないが俊作たちのことを思っていることである。

「頑張つてね、シュンちゃん。」

言葉も短めに荷物をまとめる双子。

「もちろん美佳と梨佳も帰れないわよ。」

「えーと、私たちは帰…。」

ひかりの竹刀が鈍く輝き双子を黙らせる。

この後、日が暮れるまでスパルタ補習が行われたらしい。

第二話 ・ 補習の報酬 ・ (後書き)

2話は後半があるので随時更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306t/>

Best

2011年10月9日03時52分発行